慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	音楽のコミュニケーションの研究 : シュッツとフッサールの知見による内的時間・リズムの検討
Sub Title	
Author	寺前, 典子(Teramae, Noriko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.68 (2009.) ,p.177- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成20年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000068-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イ病の農地土壌復旧の記念碑が建立されている。これら公害病の記憶の1990年代以降の実践／運動の様態，そして「現況」について，フィールドに即した調査・分析を行う。

そのうえで，先に仮定しておいた「現在における公害病の忘却」という事態を，もう一度丁寧にとらえ直す。

なお，2009年度現在も継続して上記(2)の研究を進めている。

追記

本研究は「〈記憶〉の社会学」という視座に立っているわけだが，2008年度には，この「〈記憶〉の社会学」の方法論的洗練の試みも同時並行的に進めた。具体的には，以下の学会報告を行った。

・三田社会学会自由報告：題目「日露戦争の記憶の“敗戦後”史―横須賀・記念艦三笠を中心に―」

・日本社会学会大会ポスターセッション：題目「〈戦後〉・横須賀の表象分析―YOKOSUKA・ヨコスカ・よこすか―」

音楽のコミュニケーションの研究

――シュッツとフッサールの知見による内的時間・リズムの検討[1)]――

寺　前　典　子

1.　研究のねらい，論述のプラン

本研究のねらいは，シュッツとフッサールの知見を用いて音楽のコミュニケーションの可能性を解明することにある。シュッツは「音楽の共同創造過程―社会関係の一研究―」において，コミュニケーションには「われわれ」経験が欠かせず，この経験の基盤となるのは「内的時間のうちで他者の諸経験の流れ」を共有することであると述べる(Schutz 1964: 173, 1991: 236)。しかしシュッツは，「内的時間」について詳述しなかった。そこで本研究は，シュッツによる音楽経験の分析を取り上げ，それをフッサールの知見で補強し「内的時間」を考察することにより，音がどのように音楽として認識され，それが他者と共有されるのかを明瞭にする。さらに，楽曲を介した身体間の同調関係をシュッツの理論を用いて「リズム」との関連から考察する。

2.　音楽経験の現象学的分析

(1)　把持の働き，受動的綜合の分析

「音楽の現象学に関する断章」(Schutz 1996)では，6つの音が提示され音楽経験の分析がなされる（図1）。受け手は，なぜ鳴っては消える音を一連の主題として認識できるのか。ここでは，シュッツの試みをフッサールの時間論[2)]と受動的綜合の分析によって補強して，その内実を明瞭にする。

図1　主題の把握の分析(Schutz 1996: 261)
*草稿の裏面に書かれていたもの。

フッサールの時間論では，〈現在〉は点ではなく幅を持つ領域とみなされる。すなわち現在化領域は，〈今〉まさに事象が目の前でありありと現れている「原印象(Urimpression)」と，〈たった今〉過ぎ去ったばかりの「把持(Retention)」，そして〈これからすぐ〉原印象へと向かう「予持(Protention)」からなる[3]。したがって図1の一連の音は，現在化領域における出来事なのである。

また受動的綜合の分析によって，能動的な行為以前に対象と対象がどのように結びつき統一的な意味を持つものとして意識に与えられるかが明瞭になる。そして「連合(Assoziation)」(Husserl 1966b: 117, 1997: 173)によって，主題の把握方法を説明しうる。連合とは，意味上の類似や対照関係にあるものどうしが結びつく受動的綜合の一現象である。つまり一連の音は，〈有意味であるゆえ受動的に連合〉して主題をなし，結果的に，6つの音からなっていたことが認識される。受動的連合現象は楽曲の随所で生じており，この連続が受け手にとって一つの音楽の経験となる。ではこの経験はどこでなされるのか。フッサールはいう。「把持的意識の統一それ自身が，経過した諸音をなおも意識の内に《把持》」する(Husserl 1966a: 38, [1967] 1974: 52)。鳴った諸音は，現在化領域に〈把持的意識〉としてつなぎとめられ，主題として内的意識に与えられるのである。次に《運命》の受け手の意識構造を検討する。

(2)　音楽経験とその意識構造[4]

体験の最初の位相における意識は，「根元的意識(Urbewustsein)」と呼ばれる(Husserl 1966a: 119, [1967] 1974: 164)。これは，把持に変様（把持的変様）する前の「原印象」にあたるその都度の今の内的意識である。また受け手は，その都度の今において音(根源的与件)を認識している（図2)。この各時間位相には，各根元的意識と各根元的与件，そしてそれ以前に変様を受けて把持的意識となったものが積み重なっている。たとえば，時間点Z_1で与えられる根元的意識U1と「休符」[5]は，Z_2で「ソ」が鳴る（与えられる）と把持的変様を受ける。また，二拍目の「ソ」が鳴ると，U2と一拍目の「ソ」そしてすでに変様したもの（U1，休符）はまた変様を受けてZ_3の位相に含まれる。このように，過ぎ去った音は消えずに把持され，曲の進行に従い根源的領野として広がる。そして受け手は，「レ」が鳴る

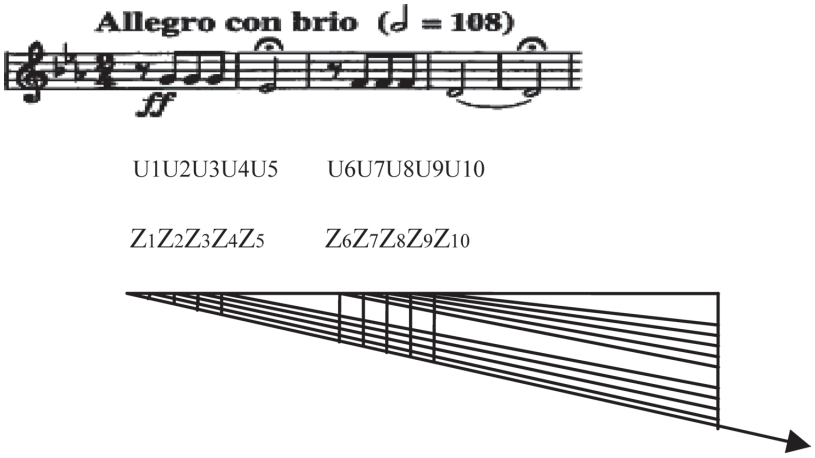

図2 《運命》の主題と時間図表：根源的領野

*出典：Beethoven, L. van, *Symphonie Nr. 5 c-moll*, op. 67.『交響曲第五番ハ短調 作品67《運命》』([2003] 2007). 音楽之友社.

時間図表は本稿による作成。U1等は根元的意識，Z1等は時間点(乗数は把持的変様の回数)を表す。

時間点Z_{10}の位相において《運命》の主題を把持するのである。このことは，実に音楽を共有する他者にも生じている。これが，「内的時間のうちで他者の諸経験の流れ……を共有する」(Schutz 1964: 173, 1991: 236)ということの内実である。次に，楽曲を介した身体間の同調関係を検討する。

3. 身体間の同調関係―生命現象のリズムと楽曲のリズム

シュッツは，『生活世界の構成』(Schutz 1970, 1996)において，生活世界を構成する事象と行為とのかかわりを「関連性(relevance)」概念によって分析する。「関連性」は多層をなすが，シュッツはその最基底の層を「根本的な賦課的関連性(fundamental imposed relevances)」と呼び，そこで「私自身の身体」や「時間構造」などを検討する(Schutz 1970: 167–82, 1996: 233–52)。時間構造では，「身体的時間の周期，……心拍」(Schutz 1970: 179, 1996: 246)などの〈生命現象のリズム〉が例示される。われわれは日ごろ「根本的な賦課的関連性」を意識していないが，実は具体的な行為を方向づけているのは，地平に控えるこれらの要素なのである。たとえば独創的な〈楽曲のリズム〉も，「根本的な賦課的関連性」としての身体の「リズム」すなわち〈生命現象のリズム〉と切り離しては考えられない。作曲家は，無意識の内に心拍といった「リズム」を参照するのである。では，奏者や聴き手の身体はなぜ同調するのか。それは，〈生命現象のリズム〉を映じた〈楽曲のリズム〉が彼らを介するために生じるのである。

4. おわりに

本研究では，音楽のコミュニケーションの可能性を論究した。「内的時間のうちで他者の諸経験の流れ」を共有することができるのは，把持的意識のなせる業である。また身体間の同調関係は，〈楽曲のリズム〉と〈生命現象のリズム〉の協働により生じるのである。

注

1) 本報告は「音楽のコミュニケーションにおける内的時間とリズムをめぐる考察―シュッツ音楽論およびフッサール現象学からのアプローチ」『現代社会学得理論研究』第3号(2009)の概略である。
2) フッサールの時間論および訳語については，斎藤([2000] 2001)を参照した。
3) 予持(Protention)は未来把持，把持(Retention)は過去把持とも訳されるが，ここでは本当の意味での「未来」や「過去」と区別するためにこのように記す。
4) 把持的変様の説明および時間図表の記号（U1など）は，貫(2003: 98–105)を参照した。
5) 《運命》の主題は，休符(Z_1)から始まる。ただし《運命》を初めて聴く人の内的意識に最初に(Z_1で）与えられるのは，休符ではなく，「ソ」である。しかし，ここでは，《運命》の聴取経験がありかつ楽譜上の休符が念頭にある人を想定し，休符も内的意識に与えられるものとする。

文献

Beethoven, Ludwig van, *Symphonie Nr. 5 c-moll*, op. 67. ([2003] 2007). 交響曲第五番ハ短調作品67《運命》. 音楽之友社.

Husserl, Edmund, (1966a). *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins, Husserliana Bd. X*, Herausgegeben von Rudolf Boehm, Den Haag: Martinus Nijhoff. 立松弘孝訳（[1967] 1974）. 内的時間意識の現象学. みすず書房.

————, (1966b). *Analysen zur passiven Synthesis, Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuskripten, Husserliana Bd. XI*, Herausgegeben von Margot Fleischer, Den Haag: Martinus Nijhoff. 山口一郎・田村京子訳（1997）. 受動的綜合の分析. 国文社.

貫成人, (2003). 経験の構造―フッサール現象学の新しい全体像. 勁草書房.

斎藤慶典，([2000] 2001)．思考の臨界―超越論的現象学の徹底．勁草書房．
Schutz, Alfred, (1964). “Making Music Together, A Study in Social Relationship,” *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Arvid Brodersen ed., The Hague: Martinus Nijhoff, 159–178. 渡部光・那須壽・西原和久訳，(1991)．音楽の共同創造過程―社会関係の一研究．アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究．マルジュ社，221–244.
――――, (1970). *Reflections on the Problem of Relevance*, Richard M. Zaner ed., New Heaven/ London: Yale University Press. 那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳，(1996)．生活世界の構成―レリヴァンスの現象学．マルジュ社.
――――, (1996). “Fragments toward a Phenomenology of Music,” *Collected Papers IV*, Helmut Wagner and George Psathas eds. in collaboration with Fred Kersten, Dordrecht/ Boston/ London: Kluwer Academic Publishers, 243–275.

専業主夫家庭妻のパーソナリティ

――就労・育児・家族の観点から――

八　木　孝　憲

1．問題と目的

近年の男女共同参画社会の推進により，女性のあらゆる分野における活躍が見受けられるようになってきている。しかし，女性の高学歴化・総合職就労が少子化問題に少なからず影響を与えているという議論もあり，フェミニズムの観点から女性の自己実現や就労を抑制しかねないとの反論もある。他方で，女性の就労による晩婚化や結婚意識の変化は，家族形態の多様化を促進し，伝統的な性役割意識に縛られない生き方が選択可能となったとも考えられる。近年では，女性（妻）が就労し家計を支え，男性（夫）が家事・育児に専念するという，性別役割分業を逆転した「専業主夫家庭」が依然少数派ながらも認知されてきている（八木，2009）。しかし，社会の伝統的な性役割意識はいまだ根強く，彼らへの偏見と差別の眼差しが危惧される。そこで，本研究では，「専業主夫家庭」という家族形態に至った経緯を女性（妻）側の視点からとらえ，彼女たちの就労や家事育児，家族，自己実現に対する意識を調査研究することを目的とする。「専業主夫家庭」の妻へのインタビュー調査により，マイノリティとしての「専業主夫家庭」の実態と意識を分析し，家族のオルタナティブ・ライフスタイルとしての「専業主夫家庭」の可能性と問題点を検討したい。

2．女性の就労と結婚

ブロスフェルド(1995)の議論では，性別役割分業が強固な国においてのみ，学歴達成と結婚の遅れが結びつく。日本は性別役割分業が強固に残っており，弱い影響ではあるが，学歴達成が結婚の遅れに結びついていることから，ブロスフェルドの議論は妥当すると考えられる。ここ数年，男性の雇用が不安定化し所得低下が進んでいるため，結婚に「逃げ込む」ことができないと察している女性が増えており，特に男性の賃金水準が低いために夫婦共働きが多い地方では，男性の不安定雇用の増加に加えて，